47 死後、人間は完全な人間の形をしている

四五三　人間の霊の形が人間であることは、すなわち、霊が形に関してもまた人間であることは、前に多くの章の中で示されたことから明らかにすることができます。特に、それぞれの天使は完全な形の人間であること(**七三〜七七**番)、それぞれの人間は自分の内的なものに関して霊であること(**四三二〜四四四**番)、天界の天使は人類から存在すること(**三一一〜三一七**番)の中で示されています。

[2]このことは、人間は自分の霊から人間であり、身体からではないこと、身体の形は霊の形にしたがって霊に付け加えられたものであってその逆ではないことから、さらにはっきりと把握することができます。なぜなら、霊は自分の形にしたがって身体を着ているからです――それゆえ、人間の霊は、身体の細部に、それどころか最小のものに働きかけていて、霊により働きかけられない部分は、すなわち、その中で霊が働いていない部分は生きていないほどになっています。

そのようであることは、だれもが、思考と意志は、身体のすべてと個々のものを、その意向に協力しないものは何もなく、また協力しないものを身体の部分ではないように、またその中にいのちがないかのように投げ出してしまうようにして、完全に動かすことだけからも知ることができます――思考と意志は、人間の霊的なものに属し、身体には属していません。

[3]人間には、身体から解き放たれた後の霊が、また他の人間の中でも、霊が人間の形で見えないのは、身体の視覚の器官が、すなわち、その目が、世で生きているかぎり、物質的であるからです。物質的なものは物質的なものしか見ませんし、霊的なものは霊的なものしか見ません。それゆえ、目の物質的なものがお

おわれて、〔その目の〕霊的なものと一緒に働くことが奪われる時、〔霊的な目が開かれて〕霊はその形の中に、人間の形の中に見られます。霊界にいる霊だけでなく、今なお他の者の身体の中にいる霊もまた見られます。

四五四　霊の形が人間の形であることは、人間は霊に関して天界の形へ向けて創造されているからです。なぜなら、天界とその中の秩序のすべてのものは、人間の心(mens)に属するものの中に集められているからです。[*1]ここから、人間に知性と知恵を受ける能力があります。

知性と知恵を受ける能力と言っても、あるいは天界を受ける能力と言っても同じことです。そのことは、「天界の光と熱」(**一二六〜一四〇**番)、「天界の形」(**二〇〇〜二一二**番)、「天使の知恵」(**二六五〜二七五**番)、天界はその形に関して全体と部分で人間を表わすことの章(**五九〜七七**番)の中に、またこのことは主の神的人間性そのものから天界とその形があることであり(**七八〜八六**番)、これらから明らかにすることができます。

四五五　ここで言われたこれらのことは、理性的な人間なら理解することができます。なぜなら、原因の結びつきから、また秩序にある真理から見ることができるからです。しかし、理性的でない人間は、それらを

---

*1　人間は、その中に神的な秩序のすべてのものが集められており、創造から形の中に神的秩序がある(四二一九、四二二二、四二二三、四五二三、四五二四、五一一四、五三六八、六〇一三、六〇五七、六六〇五、六六二六、九七〇六、一〇一五六、一〇四七二番)。
どれだけ人間が神的秩序にしたがって生きるかによって、それだけ来世で完全で美しい人間として見られる(四八三九、六六〇五、六六二六番)。

理解しません。

理解しないことには多くの理由があります――そのおもなものは、彼が真理としている自分の虚偽に反しているので、それを欲しないことです。それゆえ、理解することを欲しない者は天界への道を自分の理性に閉ざしています。それでもやはり、その道は、意志が抵抗さえしなければ開かれることができます（前の**四二四**番参照）。

人間は欲しさえすれば、真理を理解し、理性的であることができます、そのことは、私に多くの経験によって示されました。

世で神性と教会の真理を否定し、自分自身にそれらに反したことを確信して、理性のない者となった悪い霊が、しばしば、神的な力によって、真理の光の中にいる者たちの方へ向けられました。その時、天使のように、すべてのものを理解し、真理であることを、またすべてのことを理解したことも告白しました。

しかし、自分自身に戻ると、彼らの意志に属す愛へ向きを変えると、すぐさま、何も理解しないで、正反対のことを話しました。

［2］さらにまた私は、地獄のある者が、「〔自分たちの〕行なっていることが悪であり、考えていることが虚偽であることを知り、認知している。しかし、自分たちの愛の快さに、したがって意志に抵抗できない。その意志が自分たちの思考を、悪を善のように見ることへ、虚偽を真理のように見ることへと導く」と言っているのを聞きました。

ここから、悪からの虚偽の中にいる者は理解することができ、したがって理性的であることができても、彼らは欲しないことが明らかになりました。彼らが欲しないことの理由は、彼らが真理よりも虚偽を愛したからであり、その虚偽は彼らがそれらの中にいる悪と一致するからです。

愛することと意志することは同じです。なぜなら、人間は意志するものを愛し、愛するものを意志するからです。

［3］人間は意志さえすれば理解することができるような状態にあるので、私に、教会と天界のものである霊的な真理が与えられ、さらにまた理性で確信するようになりました。この理由は、そのように、多くの者のもとで理性を閉ざしている虚偽が、理性的なものによって追い払われ、こうしておそらく少しは目が開かれるようにするためでした。なぜなら、霊的な真理を理性的なものによって確信することは、真理の中にいるすべての者に与えられているからです。

照らされた理性から、みことばの中に真理を見ないなら、だれが、みことばをその文字どおりの意味から理解するでしょうか？

そうでなければ、同じみことばから、こんなにも多くの異端はどこからでしょうか？[*2]

＊2　みことばからの教会の教えの真理から、原理は導かれ、最初に承認されなくてはならず、その後、記憶知に相談することが許されている（六〇四七番）。

このように、記憶知によって理性的にそれらを確信することは信仰の真理について肯定の中にいる者に許される、けれども、否定の中にいる者には許されない（二五六八、二五八八、四七六〇、六〇四七番）。

霊的な真理から理性的に自然的な真理である記憶知の中に入ることは神的秩序にしたがっており、後者から前者へ入ることは神的秩序にしたがっていない。自然的なものの中への霊的な流入は存在する、けれども、霊的なものの中への自然的なまたは物質的な流入は存在しないからである（三一一九、五一一九、五二五九、五四二七、五四二八、五四七八、六三二二、九一〇九、九一一〇番）。

四五六　身体から解放の後、人間の霊が人間であり、似た形をしていることは、多年にわたる日々の経験によって私に明らかなものとなっています。なぜなら、私は千回も彼らを見、聞き、彼らと話し、また、このようであることを信じないことについて、世の中の人間によって、信じている者は学識のある者から単純な者のように見なされることについても話したからです。

霊たちは、このような無知が今なお世界の中で続くこと、教会内で最大に続いていることを心から悲みました。

[2]彼らは、「しかし、この信仰は特に学識のある者から広がった。彼らは霊魂について身体の感覚から考え、そこから霊魂について単なる思考のような観念であるとしか理解しなかった。そのとき霊魂は、その中に何らかの主体なしに、またそこから眺められるとき、何か飛び去りやすい純粋なエーテルのようなものであって、それは身体が死ぬとき、消散せざるをえないものである――しかし、教会では、みことばから霊魂の不滅が信じられているので、思考のようなものである何か生命力のあるものを付加し、しかしそれでも、人間にあるような感覚的な能力は再び身体と結合する以前には付加させなかった」と言いました。

この見解に基づいて、復活についての教えが、また最後の審判が行なわれる時、霊魂と身体の結合がなされるという信仰があります。ここから、だれかが、教えから、また同時に仮説から霊魂について考えるとき、それが霊であり、人間の形をしていることをまったく理解しなくなります。

付け加えれば、今日のほとんどの者は、霊的なものが何であるか知らず、ましてすべての霊や天使である霊的なものが何らかの人間の形をしていることを知りません。

[3]ここから、世からやって来るほとんどすべての者が大いに驚くことは、〔自分が〕生きていること、以前と等しく人間であり、見、聞き、話し、また自分たちの身体に以前のように触覚が授けられていること、まったく何も違わないことです(前の**七四**番参照)――しかし、自分自身に驚くことがやんだ後、教会が死後の人間のこのような状態について、このように天界と地獄についても何も知らないことに驚きます。そのときそれでも、世で生きていた者がどれほど多くても、すべての者は来世にいて、人間として生きています。

さらにまた、これは教会の信仰の本質的なものであるので、なぜこのことが、幻によって人間に明らかにされなかったか不思議に思ったので、天界から彼らに、「このことをすることができる。なぜなら、主が喜ばれるとき、これ以上に容易であるものは何もないからである。しかし、それでも自分自身がそれらに反した虚偽の中にいて、これを確信した者は、たとえその者自身が見たとしても信じるようにならない。さらに、虚偽の中にいる者を、幻によって確信させることは危険である。こうして最初に信じ、またその後、否定し、このように、そのことが真理そのものを冒涜することになるからである。なぜなら、冒涜することは、信じてその後、否定することであるからである。真理を冒涜する者は、すべての地獄の中で、最低の、また最もきびしい地獄に押し下げられる[*3]」と言われました。

[4]この危険が次の主のことばによって意味されています、

主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心(cor)をかたくなにされた。彼らが目で見、心で理解し、回心し、わたしが彼らをいやすことがないためである(ヨハネ一二・四〇)。

また虚偽の中にいて、やはり信じない者は、次のことばによって意味されます、

アブラハムは地獄の富んだ者に、「彼らにはモーセと預言者がある、彼らに聞くがよい」と言った。しかし、彼は、「いいえ、父アブラハム。もし、死んだ者からだれかが彼らのところに行くなら、回心させられます」

と言った。しかし、アブラハムは彼に、「もし、彼らがモーセと預言者を聞かないなら、さらにまた、死んだ者からだれかが生き返っても、信じない」と言った(ルカ一六・二九―三一)。

四五七　人間の霊が、最初に霊たちの世界に入るとき、そのことはその生き返りの後しばらくして起こりますが(そのことについては前に述べました)、世にいたときと似た顔をしていて、似た声で話します。その理由は、その時、自分自身の外的な状態の中にいて、依然として彼の内的なものがあらわになっていないからです――これが死後の人間の最初の状態です。

けれども、その後、顔は変化し、まったく別のものになり、彼の情愛または支配愛に似たものになります。彼の心のものである内的なものは世で、また彼の霊は身体の中でそのようなものであったのです。なぜなら、人間の霊の顔は、身体の顔とは非常に違っているからです。身体の顔は両親からのものです、しかし、霊の顔は彼の情愛からであり、その映像です。身体での生活の後、外的なものが取り除かれ、そして内的なものがあらわにされるとき、霊はその情愛の中へやって来ます。これが人間の第二[*注]の状態です。

私は世から新しく来たある者を見たとき、その顔つきと話し方から彼らがわかりました、しかしその後に見たとき、彼らがわかりませんでした。善の情愛の中にいた者は、美しい顔で見られます、けれども、悪の情愛の中にいた者は、醜い顔で見られました――本質的に見るとき、人間の霊はその情愛以外のものではなく、その外なる形が顔であるからです。

＊注　初版には「第三」とあります。

さらにまた、顔が変化することの理由は、来世ではだれも自分自身のものでない情愛を装うことは、このように自分自身と反対のものである愛の顔をつけることは許されないからです。どれほど多くてもそこにいるすべての者は、考えることをそのまま話し、意志することをそのまま顔つきや振る舞いで示すような状態にされます。

＊3　冒涜は、人間のもとの善と悪の混合、なおまた真理と虚偽の混合である(六三四八番)。
真理と善を、すなわち、みことばと教会の聖なるものを冒涜することは、最初にそれらを認め、そしてさらに、それらにしたがって生きるなら、そしてその後、信仰から去り、それら否定し、自分自身と世俗に生きる者にしかできない(五九三、一〇〇八、一〇一〇、一〇五九、三三九八、三三九九、三八九八、四二八九、四六〇一、一〇二八四、一〇二八七番)。
もし、人間が心の悔い改めの後、以前の悪に戻るなら、それは冒涜であり、その時、その後の彼の状態は以前の状態よりも悪くなる(八三九四番)。
聖なるものを認めなかった者、ましてそれを知らない者は、冒涜することができない(一〇〇八、一〇一〇、一〇五九、九一八八、一〇二八四番)。
異教徒は、教会外にいて、みことばを持たないので、冒涜することができない(一三二七、一三二八、二〇五一、二二八四番)。
それゆえ、ユダヤ人に内的な真理は明かされなかった。なぜなら、もし明かされ、認められたなら、それを冒涜してしまったであろうから(三三九八、四二八九、六九六三番)。
来世で冒涜者の運命は、すべてのうちで最悪である。彼らが認めた善と真理が存続し、悪と虚偽も存続し、密着するので、いのちが引き裂かれるからである(五七一、五八二、六三四八番)。
それゆえ、主により、冒涜が生じないよう、最大に配慮されている(二四二六、一〇二八七番)。

それでここから、すべての者の顔はその情愛の形と似姿となっています。そしてここから、前に述べたように(**四二七**番)、世で互いに知りあった者はすべて霊たちの世界でもまた互いに知り合います、けれども、天界で、また地獄でも知り合うことはありません。*4

四五八　偽善者の顔は他の者の顔よりも遅く変化します、その理由は、慣れることにより自分の内的なものを善の情愛で模倣する習慣を得たからです。それゆえ、長い間、美しくなくもないように見えます――しかし、彼らのもとの見せかけは連続的に取り去られ、そして心のものである内的なものがその情愛の形へと整えられるので、その後、彼らは他の者よりも醜くなります。

偽善者とは、天使のように話しますが、内部で自然だけを認め、このように神性を認めないで、ここから教会と天界のものを否定する者です。

四五九　それぞれの人間が、内的に神的真理を愛し、それらにしたがって生きるほど、死後の人間の形はそれだけ美しいことを知らなくてはなりません。なぜなら、それぞれの者の内的なものはその愛と生活にしたがって、開かれ、形作られるからです――それゆえ、情愛が内的なほどますます天界に一致し、ここからそれだけ顔は美しく、ここから、最内部の天界には最も美しい天使がいます、天的な愛の形をしているからです――けれども、外的に神的真理を愛し、こうしてそれらにしたがって外的に生きた者は、あまり美しくありません。なぜなら、外的なものだけが彼らの顔から輝き出て、内的な天界的な愛は外的なものを通して、したがって、天界の形がその本来のもののように光り貫いて、輝き出ていないからです。相対的に何か暗いものが、内的ないのちから生かされていないものが、彼らの顔から現われています。

一言でいえば、すべてのものの完全さは内的なものに向かって増大し、外的なものに向かって減少します、〔その〕完全さのように、美しさもまた増大し、減少します。

私は第三の天界の天使の顔を見ました。その顔は、どんな画家が自分のすべての技術をもってしても、彼らの顔の中に現われている光といのちの千分の一にも匹敵するような何らかの光を、決して自分の色に与えることできないようなものでした――しかし、最も低い天界の天使の顔なら、ある程度、匹敵する色を与えることができます。

四六〇　最後に、今までだれにも知られていないあるアルカナを与えます。それは、主から発出し、天界をつくるすべての善と真理は、人間の形であり、このことは全体と最大のものだけでなく、すべての部分と最小の部分でもそうであり、この形が主からの善と真理を受けるそれぞれの者に働きかけ、そして天界の中

＊4　顔は内的なものと対応するものに形作られている(四七九一～四八〇五、五六九五番)。心(mens)の情愛と顔や顔つきの対応について(一五六八、二九八八、二九八九、三六三一、四七九六、四七九七、四八〇〇、五一六五、五一六八、五六九五、九三〇六番)。
天界の天使のもとで、顔は心に属す内的なものと一つとなっている(四七九六～四七九九、五六九五、八二五〇番)。
それゆえ、みことばの中の「顔」は、心に属すものである内的なものを、すなわち、情愛と思考に属すものを意味する(一九九九、二四三四、三五二七、四〇六六、四七九六、五一〇二、九三〇六、九五四六番)。
脳から顔への流入は時の経過の中でどのように変化したか、そのこととともに顔そのものは内的なものとの対応に関して〔どのように変化したか〕(四三二六、八二五〇番)。

のそれぞれの者が受け入れにしたがって人間の形となっていることです。

ここから、天界は、全般的にまた個別的に、それ自体に似ていて、**五九**番から**八六**番までの四つの章の中で示されたように、全体・それぞれの社会・それぞれの天使は人間の形をしています。このことに、天使のもとの天界的な愛からのものである思考の最小のものも人間の形をしていることをつけ加えます。

このアルカナは、天界の光の中にあるので、人間の知性に受け入れられることはほとんどありません、けれども、天使の知性には、はっきりと受け入れられています。

48 死後、人間は世でもっていたすべての感覚・記憶・思考・情愛をもち、自分の地的な身体を除いて、何もあとに残さない

四六一 人間は自然界から霊的なものの中に移るとき、そのことは死ぬときに起こりますが、自分のすべてのものを、すなわち、人間自身にあるものを、自分の地的な身体を除いて、自分自身にもっていることが、多くの経験から私に明らかとなりました。

なぜなら、人間は霊界に、すなわち、死後の生活に入るとき、世でもっていたような身体の中にいるからです。外観に何も相違はありません、相違を感じないし、見えないからです――しかし、彼の身体は霊的なものであり、したがって地的なものから分離したもの、すなわち、清められたものです。霊的なものが霊的なものに触れ、見るとき、それは完全に自然的なものが自然的なものに触れ、見るときのようです。

ここから、人間は霊になったとき、世にあった自分の身体の中にいるとしか知りません、ここから死んだことも知りません。

［2］人間霊〔人間的な霊〕もまた世で享受した外なる感覚と内なる感覚のすべてを享受します。以前のように見、以前のように聞き、話し、また嗅ぎ、味わい、そして以前のように触れられるとき、触覚を感じます。さらにまた以前のように、願い、望み、欲し、考え、熟考し、感じ、愛し、意志します。知的な探究を楽しむ者は、以前のように読み、書きます――一言でいえば、人間は一つの生活からもう一つの生活へ、すなわち、一つの世界からもう一つの世界へ移るとき、ある場所から他の場所へ移るようなものであり、自分自身の中に人間が所有するようなすべてのものをもっています。そのように、地的な身体のものでしかないもの

の死の後、人間自身の何かが失われた、と言われることはできません。

［3］自然的な記憶もまた人間自身にあります。なぜなら、幼児期の最初から生活の終わりまで、世で聞き、見、読み、言い、考えたどんなものでもすべて保有するからです。しかし、記憶の中に内在する自然的な対象は、霊界で再現されることができないので、それらの対象から考えないときの人間の場合のように、休止します。しかしそれでも、主が喜ばれる時、再現されます。

けれども、この記憶について、また死後の状態について、すぐにあとで多くのことを述べます。

人間の死後の状態がこのようであることを、感覚的な人間は、感知しないので、まったく信じることができません。なぜなら、感覚的な人間は、霊的なものについてもまた自然的にしか考えることができないからです。それゆえ、感じないものを、すなわち、自分の肉眼で見、またその手で触れないものを、トマスについて書かれているように（ヨハネ二〇・二五、二七、二九）、「存在しない」と言います。

感覚的な人間がどんなものであるかは、前に述べました（**二六七**番とそこの＊3）。

四六二（その1）　しかしそれでも、人間の霊界での生活と自然界での生活の間で、外なる感覚とその情愛と同様に内なる感覚とその情愛に関して、その相違は大きなものです。

天界にいる者は、世にいたときよりもさらに鋭敏に感じます、すなわち、見、聞き、さらにまた賢く考えます。世の光に数段階もまさる天界の光から見るからです（前の**一二六**番参照）。さらにまた地のものに数段階もまさる霊的な大気を通して聞くからです（**二三五**番）。

これらの外なる感覚は、世のもやの暗さと比べて明るさのように、夕方のやみと比べて昼間の光のように相違しています――というのは、天界の光は、神的真理であるので、天使たちに、最も微細なものを認め、識別するような視覚を与えるからです。

［2］さらにまた、彼らの外なる視覚は内なる視覚に、すなわち、理解力に対応します。なぜなら、天使のもとで、ある者の視覚は一つとして働くように他の者に流入し、ここから彼らにそれほどに大きな鋭さがあるからです――そしてまた同様に、聴覚は彼らの知覚に対応し、それは理解力にも意志にも属します。ここから、話している音声と言葉の中に、彼の情愛と思考の最も微細なものを、その音声の中に情愛に属するものを、またその言葉の中に思考に属するものを認めます（前の**二三四**～**二四五**番参照）。しかし、天使のもとの残りの感覚は、視覚と聴覚ほどに鋭敏ではありません。その理由は、視覚と聴覚は彼らの知性と知恵に役立ちます、しかし残りの感覚は役立たないで、もし同じ程度に鋭敏であったなら、彼らの知恵の光と快さを取り去り、いろいろな欲望と身体のものである快楽の快さをもたらし、それらが強く働きかければかけるほど、それだけ理解力をくもらせ、弱めるからです。このことは世でもまた人間のもとに生じています。味覚や身体の触覚の誘惑におぼれるほど、その者は霊的な真理に関してそれだけ鈍く、愚かです。

［3］天界の天使の思考と情愛のものである内的な感覚もまた、世で彼らにあったよりもさらに鋭敏でさらに完全であることは、「天界の天使の知恵」の章の中で言われ、示されたことから明らかにすることができます（**二六五**～**二七五**番）。

けれども、地獄の中にいる者の状態の相違については、世での彼らの状態と比べて、それもまた大きなものです。なぜなら、天界の天使のもとの外なるまた内なる感覚は完全ですぐれていますが、それほどに地獄の彼らのもとで感覚もまた不完全であるからです。しかし、後者の状態はあとで扱います。

四六二（その2）人間が自分自身とともに世からの自分の記憶のすべてのものもまた持っていることが、多くの機会に示されました。私が見て、聞いた、それら多くのことについて、話しておく価値のあるものをいくつか順に述べます。

世で犯した自分の罪悪や破廉恥な行為を否定した者がいました。それゆえ、罪のない者であると信じられないように、すべてのものが明らかにされ、彼らの記憶から、彼らの最初の年齢のものから最後の年齢のものまで順に列挙されました――特に、姦淫と淫行でした。

[2]悪のたくらみで他の者を欺き、盗んだ者がいました。彼らの欺瞞（ぎまん）と盗みもまた次々と数え上げられ、それらの多くは、世で彼ら以外には、ほとんどだれにも知られませんでした――当時、彼らの心(animus)を一緒になってそらせていたすべての考え・意図・快さ・恐れとともに、光の中で明らかにされたので、彼らはそれらの罪悪もまた認めました。

[3]わいろを受け取り、裁判から利得をなした者がいました――彼らは自分自身の記憶から同様に調べられ、それらから彼らの職務の最初の時のものから最後の時のものまで列挙されました。個々のものが量と質に関して、その時期、彼らの心の状態と意図とともに、彼らはこれらのすべてを同時に思い出し、視覚に示され、それらは数百以上でした。

驚くべきことですが、ある者には、これらのことが書かれている彼らの記憶の書そのものが開かれ、彼らの前で、ページからページへと読まれました。

[4]処女を性的な堕落へ誘った者、純潔を踏みにじった者がいました。同じような裁判に呼ばれ、彼らの記憶から個々のものが引き出され、繰り返されました。処女と女たちの顔そのものもまた、場所・会話・意

図とともに、その場にいるかのように現われました。このことは、幻かのようにそのように突然と現われます。この出現は、数時間にもわたって何回も続きました。

[5]他の者を何ら尊重しないで侮辱する者がいました。私は、ある人物についての侮辱や中傷が、その言葉そのものとともに、また、その本人の前で、順に列挙されるのを聞きました。それらのすべては生み出され、同時に生きいきと現われます。それでも、その個々のものは、世で生きたとき彼により必死に隠されていたものです。

[6]欺きの口実のもとに親戚からその相続財産を奪った者がいました――彼もまた同じように納得させられ、裁かれましたが、驚くべきことに、彼らの間の手紙や伝票が、私に聞こえるように読まれ、「一つの言葉も失われていない」と言われました。

[7]さらにまた同じ者が、自分が死ぬ少し前に、隣人をひそかに毒で殺しました――このことは次のように明らかにされました。足元に穴を掘り出しているのが見られ、掘り出すうちに、墓からかのように男が出てきて、彼に、「おまえは私に何をしたのか?」と叫んだのです。

その時、その毒殺者はどのように親しく彼と語り、杯を差し出したか、さらに前もって何を考え、その後、何が起こったか、すべてのことがあらわにされました。これらが明らかにされ、地獄へと裁かれました。

[8]一言でいうと、すべての悪・犯罪・強盗・策略・陰謀は、それぞれの悪い霊に明らかにされ、そして彼らの記憶そのものから取り出され、納得させられます。すべての状況が見られるので、否定の余地もありません。

さらにまた、天使により見られ、調べられたある者の記憶から、私は、その者が心(mens)の内部で、あ

る日からある日へと何を考えたか、またこのことが誤りなしに、それらの日々、まさに彼の中にあったもののように思い出されたことを聞き、知りました。

［9］これらの例から、人間はすべての記憶を自分自身にもつこと――このように世で隠されていて、死後、現わされないものは何もないことを明らかにすることができます。またこのことは、次の主のことばにしたがって、多くの者の集まりの中でなされます、

しまい込まれていて、明らかにされないものはなく、隠されていて、知られないものはありません。それで、あなたがたが暗やみで言ったことが、光の中で聞かれ、耳の中で語ったことが……屋上で言い広められます（ルカ一二・二、三）。

四六三　死後、人間に自分の行為があらわにされる時、調べる役目を与えられている天使は、その顔を熟視します。それから、身体全体を隅から隅まで、一方の手の指から始めて、もう一方の手の指へ、このように全体へと調べを広げます。

私はどうしてこのことがなされるのか不思議でしたが――「思考と意志の個々のものが脳に刻み込まれているように、というのも、そこに個々のものの最初のものがあるからですが、このようにまた思考と意志のすべてのものがその最初のものから達する身体の全体に刻み込まれており、その最後のものとしてその中に終結しています。ここから、意志とそこからの思考から記憶の中に刻み込まれたものは、脳に刻み込まれているだけでなく、人間の全体にもまた刻み込まれて、身体の部分の秩序にしたがって、そこに秩序のうちに

存在します」と言われました。ここから、悪い人間は自分自身の悪であり、善い人間は自分自身の善であるように、人間全体は自分自身の意志とそこからの思考の中にいるかのようなものであることが明らかです。[*1]

これらからもまた、みことばの中の、人間の「いのちの書」〔「黙示録」二〇・一二〕によって何が意味されるか明らかにすることができます。すなわち、行為も思考も、すべてのものは人間全体に刻み込まれていること、また記憶から呼び起こされるとき、本の中に読まれるように、霊が天界の光の中で見られるとき、似姿の中に見られるように現われることです。

これらに、私は、人間に死後も残る記憶について注目すべきことを付け加えます。そのことによって私は、記憶の中に入ったものは全般的なものだけでなく、最も個々のものもまた、残存し、決して消されないことを確信したのです。

世のように中に何か書かれている本が私に見られ、「それは書いた者の記憶から存在する。彼自身によって世で書かれたその本の中に欠けている言葉は何もない。このようにある者の記憶から、すべての最も個々のものが、さらに本人が世の中で忘れたことすら、引き出されることができる」と教えられました――その理由もまた言われました、すなわち、「人間に外なる記憶と内なる記憶がある。外なる記憶はその人間の自然的

＊1　善い人間・霊・天使は自分自身の善と自分自身の真理である、すなわち、その全体は彼の善と真理がどのようなものであるかによる（一〇二九八、一〇三六七番）。
その理由は、善は真理をつくり、真理は理解力をつくるからであり、意志と理解力は、人間・霊・天使のもとのすべてのいのちをつくるからである（三三三三一、三六二三、六〇六五番）。
人間・霊・天使は自分自身の愛である、と言っても同じである（六八七二、一〇一七七、一〇二八四番）。

な記憶、そして内なる記憶はその人間の霊的な記憶である。人間が考え、意志し、話し、行ない、さらにまた聞き、見た個々のものは彼の内なる記憶、すなわち、霊的な記憶に刻み込まれている。[*2] そこにあるものは、同時に霊そのものに、その身体の四肢に刻み込まれているので、前に述べたように、決して消されない――このように、霊はその霊の意志の思考と行為にしたがって形作られる」。

私は、これらのことは背理のように見え、ここからほとんど信じられないことを知っています。しかしそれでも真理です。

それで、人間が自分自身の中で考えたこと、ひそかに行なったことが、死後も隠されていると信じてはなりません。その時、すべてと個々のものは、日の中で明るく照らされてはっきりと見られる、と信じなくてはなりません。

四六四　外なるまたは自然的な記憶は、死後も、たとえ人間に内在するにしても、それでもやはりまったく自然的なものとしてそこにあり、来世で再生されません、しかし、自然的なものに対応によって接合している霊的なものが再生します。それでもそれは視覚に見られるとき、自然界の中で見られるものと完全に似た形をしています。なぜなら、天界に見られるすべてのものは、世の中でも同様に見られるからです。それでも、「天界の中で表象するものと外観」についての章で見られ、示されているように（**一七〇～一七六**番）、その本質は自然的ではなく霊的です。

［2］しかし、外なるまたは自然的な記憶は、自然に固有のものである物質的なものから、時間と空間から、またその他のものから得られるかぎり、世で彼に役立ったようには、霊には役立ちません。人間は世で、外

なる感覚的なものから考えて、同時に内的なまたは理解力からの感覚的なものから考えなかったとき、霊的でなく自然的に考えたからです。けれども、来世で、霊が霊たちの世界にいる時、自然的でなく霊的に考えます。

霊的に考えることは、知的にまたは理性的に考えることです。

ここから、物質的であるものに関する外なるまたは自然的な記憶は、その時、休み、人間が物質的なもの

＊2　人間に二つの記憶がある、外的なものと内的なもの、すなわち、自然的なものと霊的なものである（二四六九～二四九四番）。
人間は自分に内的な記憶があることを知らない（二四七〇、二四七一番）。
内的な記憶は外的なものにどれほどまさるか（二四七三番）。
外的な記憶の中にあるものは世の光の中にある。けれども、内的な記憶の中にあるものは天界の光の中にある（五二一二番）。
人間が知的に理性的に考え、話すことができるのは、内的な記憶からである（九三九四番）。
人間が考え、話し、行なった、また見て、聞いた、すべてと個々のものは内的な記憶に刻み込まれている（二四七四、七三九八番）。
その記憶は彼の「いのちの書」〔黙示録二〇・一二〕である（二四七四、九三八六、九八四一、一〇五〇五番）。
内的な記憶の中に信仰のものとされた真理があり、愛のものとされた善がある（五二一二、八〇六七番）。
習慣となり、生活のものとなったものは、そのことによって外的な記憶の中で消され、内的な記憶の中にある（九三九四、九七二三、九八四一番）。
霊と天使は内的な記憶から話し、ここから彼らに普遍的な言語がある（二四七二、二四七六、二四九〇、二四九三番）。
世の言語は外的な記憶のものである（二四七二、二四七六番）。

によって世の中で吸収し、正しい推論をしたものだけが役立ちます。

物質的であるものに関する外なる記憶が休むことの理由は、再現されることができないからです。霊と天使は彼らの心のものである情愛とここからの思考から話すので、それゆえ、天界の中の天使の話し方について、また人間との彼らの話し方について言われたこと(**二三四～二五七**番)から明らかにすることができるように、彼らは情愛と思考に適合しないものを口に出すことができません。

[3]ここから、人間が世で言語によって、知識によって、どれだけ理性的になったかによって、それだけ死後、理性的であるのであって、どれだけ言語と知識を知っていたかによるのではまったくありません。

私は、世で、ヘブル語・ギリシア語・ラテン語のような古代語を知っていたことから学識のある者と信じられたけれども、それらの中に書かれていることによって自分自身の理性を養わなかった多くの者と語りました。〔彼らのうちの〕ある者はそれらの言語について何も知らなかったような単純な者に見え、ある者は愚鈍に見えました。しかしそれでも、彼らには他の者よりも賢明であるといったような高慢さが残っていました。

[4]私は、記憶を多くもつほど、それだけ人間は賢明であると世で信じていた者と、また多くのもので記憶を豊かにし、ほとんどそれらだけから話し、このように自分自身からでなく他の者から話し、記憶の事柄から何ら理性をつくり上げなかった者と語りました。

彼らのある者は鈍く、ある者は愚かでした。何らかの真理を、真理であるのかどうか、まったく何も理解しないで、自分自身を学識のある者と呼ぶ者らによって真理として見せびらかされたすべての虚偽をつかみ取りました。このようであるのかどうか、何も自分自身からは見ることができず、したがって、他の者の言

うことを聞いたとき、まったく理性的でないからです。

[5]さらにまた私は、世で多くのことを、それどころか記憶知におけるすべての種類のことを書き、そのことによって世界中の多くの者から、学識ある者としての名声を得た者と語りました。

彼らのある者は、実際に真理について、「真理である」あるいは「真理でない」と推論することができました。ある者は、真理の光の中にいた者に向きを変えたとき、真理であることを理解しました、しかしそれでも、それらを理解したがりませんでした、そのために、自分自身の虚偽の中に、このように自分自身の中にいたとき、それらを否定しました。ある者は、無学な大衆よりも賢明ではありませんでした。書き上げ、書き写したような記憶知を通して、このようにいろいろな種類のもので、自分の理性を養った者もいました――けれども、教会の真理に反対し、記憶知から考え、その記憶知によって虚偽を自分自身に確信した者は、自分の理性を育てないで、単に推論する能力だけを育てました。その能力は世で推理力と信じられています、しかし、推理力から分離した能力です。それは好むものならどんなものでも確信する能力であり、すでに受け入れた原理から、また感覚の欺きから、真理でなく虚偽を見ることの能力です――このような者に真理を認めさせるようにすることは決してできません。真理は虚偽から見られることができませんが、虚偽は真理から見られることができるからです。

[6]人間の理性は庭園や花園に、耕地に似ています――記憶は土地であり、記憶知の真理と知識は種です。天界からの光と熱が生み出し、それらがなくては何も発芽しません――神的真理である天界の光が、そして神的愛である天界の熱が入るのを許されないなら、それらだけから存在する理性もまたそのようになります。

天使は、学識のある大部分の者が、すべてのものを自然に帰したこと、ここから、天界の光である真理の

光から何の真理も見ることができないように、自分の心の内的なものを自分自身に閉ざしたことを最大限に悲しんでいます――それゆえ、誤った推論によって善い単純な者の間に虚偽を広め、惑わさないように、彼らは来世で推論する能力を奪われ、見捨てられた場所に送られます。

四六五　ある霊は、いのちが身体の中にあったときに知った多くのことを思い出さないことに憤慨し、最も楽しんだ快さを失うために悲しみました――しかし、彼に、「まったく何も失わない。すべてと個々のものを知っている。やって来た王国の中では、今やそこにいて、そのようなものを引き出すことは許されないが、その世界で何も役立たない、不明瞭で、暗く、物質的なものに、身体的なものに、自分自身の理性が以前のように浸されることもなく、今やはるかによく、完全に考え、話すことができることで十分である。今や永遠の生活の役立ちに貢献するどんなものでも持っている。このようでなければ、恵まれ、幸福になることはできない。したがって、この王国の中で、記憶の中の物質的なものが除去され、休止するとき、知性が滅びると信じることは無知に属する。それでも、心が人間の外的なものから、すなわち、身体に属す感覚的なものから導き出されれば出されるほど、それだけ霊的なものと天的なものへ高揚されることが事実である」と言われました。

四六六　それらの記憶がどんなものであるか、来世ではときどき、そこだけに出現する形によって見られます（そこでは視覚に多くのものが見られますが、それらは人間のもとでは、ただ観念の中だけに生じます）――来世では、外的な記憶は、たこのような外観によって見られ、内的な記憶は人間の脳の中にあるような髄質のよ

うに見られます。ここからもまた、どのようなものであるか知ることができます。

いのちが身体の中にあったとき記憶に属すものだけに専念し、このように自分の理性を発達させなかった者のたこは、固いものに見え、内部には腱のすじのようなものが見えます。

記憶を虚偽で満たした者のたこは、無秩序なものの堆積から、髪の毛のように毛むくじゃらに見えます。

自己愛と世俗愛のために記憶のものに専念した者は、くっつき合った塊りと骨化したものに見えます。

記憶知よって、特に哲学によって、神的なアルカナを洞察しようと欲し、それらによって確信する以前には信じることもない者は、彼らのもとで記憶は暗いものに見え、それは光線を吸収し、暗やみに変えるような性質をもっています。

狡猾な者や偽善者であった者は、彼らのもとに象牙のような固い骨が見られ、それは光線をはねかえします。

けれども、愛の善と信仰の真理の中にいた者にこのようなたこは見られず、彼らの内的な記憶は光線を外的なものへ、その記憶の対象または観念の中へ伝え、そこに光線はそれ自体の土台のようにまたはそれ自体の土地のように終結し、そしてそこに快適な容器を見つけます。なぜなら、外的な記憶は秩序の最後のものであり、そこに善と真理がある時、その中に霊的なものと天的なものが穏やかに終結しているからです。

四六七　主への愛と隣人に対する仁愛の中にいる人間は、世で生きているとき、自分自身のもとに、また自分自身の中に、天使の知性と知恵をもっていますが、その内的な記憶の最内部に深く隠されていて、身体から去る前に、その知性と知恵は決して現われることができません。身体から去る時、自然的な記憶は眠り、内的な記憶に、その後、続いて、天使の記憶そのものに目覚めます。

四六八　どのように理性が発達することができるかもまた簡単に述べます。

本物の理性は、虚偽からでなく、真理から構成されます。虚偽からのものは理性ではありません。

三つの種類の真理、市民的なもの・道徳的なもの・霊的なものがあります。

市民的な真理は、王国の中の裁判に、また政治に、全般的にそこの公正と平等に関係します――道徳的な真理は、それぞれの人間の生活に、相対的に社会と交際に、全般的に誠実さと正しさに、そして特定的にすべての種類の美徳に関係します――しかし、霊的な真理は、教会と天界に、全般的に愛の善と信仰の真理に関係します。

[2]それぞれの人間のもとに、いのちの三つの段階があります(前の**二六七**番参照)――理性は市民的な真理によって第一の段階まで、道徳的な真理によって第二の段階まで、霊的な真理によって第三の段階まで開かれます。

しかし、これらの真理からの理性は、人間が真理を知ることではなく、真理にしたがって生きることによって、形作られ、開かれることを知らなくてはなりません。真理にしたがって生きることによって、霊的な情愛から真理を愛することが意味され、霊的な情愛から真理を愛することは、公正と平等を公正と平等ゆえに、誠実さと正しさを誠実さと正しさゆえに、そして善と真理を善と真理ゆえに愛することです。しかし、真理にしたがって生きながらも身体的な情愛から真理を愛することは、自分自身のために、自分自身の名声や名誉または利益のために、真理を愛することです――それゆえ、人間が身体的な情愛からそれらの真理を愛すれば愛するほど、それだけ理性的でなくなります。それらを愛さないで、自分自身を愛し、召使いが主人に仕えるように、真理は彼自身に仕えるからです。真理が奴隷となる時、真理は人間に入らないで、いのちの何らかの段階を、

その最初のものさえも、開くことはなく、単に記憶の中に、物質的な形のもとに記憶知として住み、そこで身体的な愛である自己愛と結合します。

[3]ここから、どのように人間は理性的になるか明らかにすることができます。すなわち、天界と教会のものである善と真理への霊的な愛によって第三の段階まで、誠実さと正しさへの愛によって第二の段階まで、公正と平等への愛によって第一の段階まで、理性的になります。あとの二つの愛もまた、善と真理への愛から霊的なものになります、前者は後者に流入し、それらと結合し、それらの中にその顔のようなものを形作るからです。

四六九　霊と天使は、人間と等しく記憶をもっています。彼らが聞き、見、考え、意志し、行なうものはどんなものでも、彼らのもとに存続し、そのことによって彼らの理性は絶えず養われ、このことは永遠に続くからです――ここから、霊と天使は、人間と等しく、善と真理への知識によって知性と知恵を完全にされます。

さらにまた多くの経験によって、私は霊と天使に記憶があることを知らされました――私は、彼らが考え、行なったすべてのものが、他の霊とともにいたとき、彼らの記憶から、公然とまた同じくひそかに、呼び起こされること、また、単純な善から何らかの真理の中にいた者が、知識によって知性を教え込まれ、その後、天界に上げられることを見たからです。

しかし、知らなくてはならないのは、世でいた善と真理の情愛の程度を超えてまで、知性が知識によって教えられないことです。霊と天使のそれぞれに、世で彼にあったような量と質の情愛が残り、その情愛はそ

の後、満たすことによって完全にされ、さらにまたそのことが永遠に生じるからです。なぜなら、永遠に満たされないものは何もなく、すべての事柄は変えられることができ、そのように変化によって豊かにされ、したがって増大され、結実されるからです。どんなものでも善の事柄は、〝無限なる者〟から存在するので終わりはありません。

霊と天使が真理と善の知識によって知性と知恵を絶えず完全にされていることは、「天界の天使の知恵」(**二六五～二七五**番)、「天界の異邦人と教会外の人々」(**三一八～三二八**番)の章に、また「天界の幼児」(**三二九～三四五**番)の章に見られます、このことは、世でいた善と真理への情愛の段階までであり、それを越えないことも扱いました(**三四九**番)。

49 死後、人間は世で生活したように生きる

四七〇 死後、それぞれの者に、その生活(いのち)が残ることは、みことばからキリスト教徒のだれにも知られています。なぜなら、そこの多くの箇所に、「人間は行為と働きにしたがって裁かれ、報いられる」と言われているからです――善から、また真理そのものから考える者はだれでもまた、「善く生きる者は天界に行く、悪く生きる者は地獄に行く」としか知りません。

しかし、悪の中にいる者は、自分の死後の状態が世での自分の生活にしたがっていることを信じようとしないで、特に病気であるときに起こることですが、「どのように生きたにしろ、生活から分離した信仰によって、天界はそれぞれの者に慈悲から与えられる」と考えています。

四七一 人間は行為と働きにしたがって裁かれ、報われることは、みことばの多くの箇所に言われています、そこからいくつかをここに示します――

人の子は自分の父の栄光のうちに、自分の天使たちとともにやって来る。その時、それぞれの者に、その働きにしたがって報いる(マタイ一六・二七)。

主にあって死ぬ死者は幸いである。聖霊は言う。「しかり、彼らはその労働から休む……彼らの働きは彼らに続く」(黙示録一四・一三)。

わたしは、それぞれの者にその働きしたがって与える(黙示録二・二三)。

私は、神の前に立っている死者を、小さい者と大きい者を見た。また、書物が開かれた。また、死者は書物の中に書かれたことに応じて、彼らの働きにしたがって裁かれた。……海はその中にいる死者を明け渡し、そして、死とハデスはその中にいる者を明け渡した。また、それぞれの者がその働きにしたがって裁かれた(黙示録二〇・一二、一三)。

見よ、わたしは来る……わたしの報酬は、わたしとともにあり、わたしがそれぞれの者にその働きにしたがって与えるためである(黙示録二二・一二)。

すべての者を……わたしのことばを聞いて、それを行なう者を、わたしは賢い人にたとえます……しかし、すべての者は、わたしのことばを聞いて……それを行なわない者は、愚かな人にたとえられます(マタイ七・二四、二六)。

わたしに、「主よ、主よ」と言うすべての者が天の王国に入るのではありません、天界に入るのは、わたしの父の意志を行なう者です。その日、多くの者がわたしに、「主よ、主よ、私たちはあなたの名前によって預言し、あなたの名前によって悪鬼を追い出し、またあなたの名前の中に私たちは多くの力あるわざを行なったではありませんか」と言います。しかしその時、わたしは彼らに宣言します。「わたしはあなたがたを知らない、わたしから去れ、不法を働く者どもよ」(マタイ七・二一―二三)。

その時、あなたがたは言い始めます。「私たちは、あなたの前で食べ、飲み、私たちの街路で、あなたに教えていただいた」。しかし、〔主人は〕言います。「私はあなたがたに言います、あなたがたを知らない……不正を働く者たちよ」(ルカ一三・二五―二七)。

わたしは彼らの働きに応じて、彼らの手の行為に応じて、報いる(エレミヤ二五・一四)。

エホバは……その目を人間のすべての道の上に開かれている。それぞれに、その道にしたがって、その働きの実にしたがって、与えるために(エレミヤ三二・一九)。

わたしは彼の道の上に訪れ、彼の働きを彼に返す(ホセア四・九)。

エホバは、私たちの道に応じて、私たちの働きに応じて、私たちに行なわれる(ゼカリヤ一・六)。

善の働きを行なった者が永遠のいのちに入り、悪の働きを行なった者が断罪される最後の審判について主が予言されているところに(マタイ二五・三二―四六)、その他にも、人間の救いと断罪について扱われている他の多くの箇所に、働き以外に何も取り上げられていません。

働きと行為は人間の外なる生活(いのち)であり、それらによって彼の内なる生活(いのち)がどんなものであるか示されることが明らかです。

四七二 しかし、行為と働きによって単に外なる形の中に現われるような行為と働きだけでなく、内なるものの中にあるようなものもまた意味されます。だれもが、すべての行為と働きは人間の意志と思考から発出することを知っているからです。なぜなら、そこから発出しないなら、自動人形や彫像から生じるような単なる運動となるからです――それゆえ、本質的に眺められた行為または働きは、その霊魂といのちを意志と思考から得ている単なる結果であり、結果の中の意志と思考でもあり、したがって、外なる形の中の意志と思考です。

ここから、行為または働きを生む意志と思考がどんなものであるかによって、行為と働きもそのようなもの

であることがいえます――思考と意志が善いものであるなら、その時、行為と働きは善いものです。けれども、思考と意志が悪であるなら、その時、行為と働きは、たとえ外なる形の中で同じように見えても悪です。

千の人間が同じように行なうことが、すなわち、同じような行為を示すことができます。外なる形に関してほとんど見分けることができないほど、それほど同じようにです。それでも、それぞれが本質的に見られたとき、同じではありません、意志が同じではないからです。

［2］仲間に、誠実にまた公正に行なうことを例にします――ある者は、自分自身と自分の名誉のために、誠実と公正であると見られようとする目的のために、彼らに誠実で公正に行なうことができます。第二の者は世と利益のために、第三の者は報酬と功績のために、第四の者は友情のために、第五の者は法律を恐れ、名声と職業を失うことを恐れるために、第六の者は他の者を自分の側に、悪の側にすら引き寄せるために、第七の者は欺くために、このように他の者に異なる理由で誠実にまた公正に行ないます――しかし、これらすべての行為は、たとえ善に見えても、なぜなら、仲間に誠実で公正に行なうことは善であるからです、それでも悪です、誠実と公正のために、それらを愛するためでなく、自分自身と世のために、それを愛するからです。誠実と公正は、召使いが主人に仕えるようにこの愛に仕えますが、主人は召使いが自分に役立たない時、さげすみ、追放します。

［3］誠実で公正なものへの愛から行なう者もまた、外なる形で同じように外観からは、仲間に誠実にまた公正に行ないます。彼らのある者は、みことばの中にこのように命じられているので、信仰の真理または従順から行ないます。ある者は、宗教的信念から、信仰の善または良心から行ない、ある者は、隣人の善を思いやらなくてはならないので、彼に対する仁愛の善から行ない、ある者は、主への愛の善から、善のために

善を行なわなくてはならないので、このようにまた誠実と公正のために誠実と公正を行ないます。それらの誠実と公正は主からのものであるので、主から発出する神性がそれらの中にあるので、それらを愛します。ここからそれらは本質そのものの中に神性が見られます。

これらの行為と働きは内的に善であり、それゆえ、外的にもまた善です。なぜなら、前に言われたように、思考と意志がどんなものであるかによって、それらから発出する行為または働きはそのようなものであるからです。これらがなくては行為と働きはなく、いのちのない単なる運動です。

これらから、みことばの中の「働き」と「行為」よって何が意味されるか明らかです。

四七三　行為または働きは、意志と思考に属すので、それゆえ、愛と信仰にも属します。したがって、愛と信仰がどんなものであるかによって、そのようなものとなります――なぜなら、愛と言っても、あるいは人間の意志と言っても同じであり、信仰と言っても、あるいは人間の確固たる思考と言っても同じであるからです。なぜなら、人間は愛するものを、意志もするし、人間は信じるものを、考えもするからです――人間が信じるものを愛するなら、その時、それを意志し、愛するかぎりそれを行なうことができます。

意志は愛によって燃え上がり、思考は信仰の事柄の中で照らされるので、だれもが愛と信仰は人間の意志と思考に内在し、それらの外に存在しないことを知ることができます。それゆえ、賢明に考えることのできる者しか照らされることはなく、照らしにしたがって、真理を考え、真理を欲します、あるいは同じことですが、真理を信じ、真理を愛します。[*1]

四七四　しかし、意志が人間をつくるものであり、思考はただ意志から発出するかぎり、その程度にだけつくること、行為または働きはこの二つのものから発出すること、あるいは、同じことですが、愛が人間をつくるものであり、信仰はただ愛から発出するかぎり、その程度にだけつくること、行為または働きはこの二つのものから発出することを知らなくてはなりません――ここから、意志または愛が人間そのものである、といえます。なぜなら、発出したものは、発出するものに属すからです。発出することは、把握され、見られるように、適当な形の中に生み出され、示されることです。*2

これらから、愛から分離した信仰とは何か、すなわち、それは何ら信仰ではなく、単なる知識であって、それ自体の中に何も霊的ないのちをもたないものであること、同様に、愛のない行為または働きとは何か、すなわち、それはいのちの行為または働きではなく、悪の愛と虚偽の信仰からのものが内在する、いのちの外観をもった死の行為または働きであることを明らかにすることができます。このいのちの外観が、霊的な死と呼ばれるものです。

---

*1　秩序にしたがって存在している全世界の中のすべてのものは善と真理に関係するように、そのように人間のもとのすべてのものは意志と真理に関係する(八〇三、一〇一二番)。
その理由は、意志は善を受け入れるもの、理解力は真理を受け入れるものであるからである(三三三一、三六二三、五二三二、六〇六五、六一二五、七五〇三、九三〇〇、九九九五番)。

信仰は真理に属し、真理は信仰に属すので、真理と言っても、あるいは信仰と言っても同じことになる。そして愛は善に属し、善は愛に属すので、善と言っても、あるいは愛と言っても同じことになる(四三五三、四九九七、七一七九、一〇一二二、一〇三六七番)。
ここから、理解力は信仰を受け入れるもの、意志は愛を受け入れるものであることがいえる(七一七九、一〇一二二、一〇三六七番)。
人間の理解力は神への信仰を受け入れることができ、意志は神への愛を受け入れることができるので、人間は信仰と愛で神と結合されることができ、愛と信仰で神と結合されることのできる者は、永遠に死ぬことがない(四五二五、六三二三、九二三一番)。

*2　人間の意志は、愛または善の容器であるので、彼のいのちのエッセ(存在)そのものであり、理解力は、信仰または真理の容器であるので、ここからのいのちのエキシステレ(実在)である(三六一九、五〇〇二、九二八二番)。
そのように、意志のいのちは人間の主要ないのちであり、理解力のいのちはここから発出する(五八五、五九〇、三六一九、七三四二、八八八五、九二八二、一〇〇七六、一〇一〇九、一〇一一〇番)。
火あるいは炎から発出する光と同様である(六〇三二、六三一四番)。
ここから、人間は意志とここからの理解力から人間であることがいえる(八九一一、九〇六九、九〇七一、一〇〇七六、一〇一〇九、一〇一一〇番)。
それぞれの人間もまた、彼の意志の善とここからの理解力にしたがって、他の者から愛され、尊重される。よく意志し、よく理解する者は愛され、尊重され、そして、よく理解しても、よく意志しない者は退けられ、さげすまれるからである(八九一一、一〇〇七六番)。
人間は死後もまた、彼の意志とここからの理解力を持ち続ける(九〇六九、九〇七一、九三八六、一〇一五三番)。
それゆえ、人間は死後、彼の愛とここからの信仰を持ち続け、信仰に属すものであっても、同時に愛に属さないものは、人間の中に存在せず、そのように人間に属すものではないので、その時、消滅する(五五三二三六四、一〇一五三番)。

四七五　さらに、人間全体は行為または働きの中に示されていること、人間の内的なものである意志と思考は、あるいは、愛と信仰は人間の外的なものである行為と働きの中に存在する以前に完備していないことを知らなくてはなりません。行為と働きは最後のものであり、それらの中に意志と思考が終結し、終結しないなら、限定されないようなもの、まだ存在しないようなもの、したがってまだ人間の中に存在しないようなものであるからです。

行なうことができるのに行なわないで、考え、意志することは、容器に閉じ込められた炎のようなものであり、それは消えます。そして砂地に投げられた種のようなものであり、生長しないで、その生殖力とともに滅びます。しかし、考え、意志し、そしてここから行なうことは、周囲に熱と光を与える炎のようなものです。また地中の種のようなものであり、それは木または花に生長し、存在するようになります。

意志しても、行なうことができるときに行なわないなら、意志しないことであり、そして、愛しても、できるときに善を行なわないなら、愛さないことであり、したがって意志し、愛することを単に考えるだけのことであり、このように分離した思考であって、これは消え、散らされることを、だれでも知ることができます。

愛と意志は、行為または働きの霊魂そのものです。人間が行なう誠実と公正の中でその身体を形作ります。霊的な身体は、あるいは人間の霊の身体は、別の出所からではありません、すなわち、人間は愛または意志から行なうもの以外の他のものから形作られることはありません（前の**四六三**番参照）。一言でいえば、人間のすべてのものは、またその霊のすべてのものは、その行為または働きの中に存在します。*3

四七六　そこでこれらから、死後、人間に残るいのち（生活）によって何が意味されるか明らかにすることができます。すなわち、それは本質的に人間の愛と信仰のすべてのものを含むので、単に潜在的な力の中だけでなく、行為の中に存在する愛とそこからの信仰であり、そのように行為または働きです。

四七七　支配愛が存在し、それは死後、人間に残り、永遠に変化することもありません。それぞれの者に多くの愛がありますが、しかしそれでも、すべての愛はその支配愛に関係し、支配愛と一つとなっています、すなわち一緒になって支配愛を構成しています。

支配愛と一致するすべての意志は、愛されるので、愛と呼ばれます。

これらの愛は内的なものと外的なものです――それらは直接にまた間接に結合しています。支配愛に近いもの、遠いもの、いろいろな方法で仕える愛があります。

---

*3　内的なものは連続的に外的なものの中に、最外部または最後のものにまで流入し、そこに存在し、存続する（六三四、六四五一、六四六五、九二一五、九二一六番）。
単に流入するだけでなく、最後のものの中に同時に存在するものもまた形作る。それをどのような秩序で（五八九七、六四五一、八六〇三、一〇〇九九番）。
ここからすべての内的なものは、結びつきの中に保持され、存続する（九八二八番）。
行為または働きは最後のものであり、それらの中に内的なものがある（一〇三三一番）。
それゆえ、行為または働きにしたがって報いられ、裁かれることは、愛と信仰に属するものであるすべてのものにしたがって、すなわち、人間の意志と思考にしたがって報いられ、裁かれることである。それらは人間の中にある内的なものであるからである（三一四七、三九三四、六〇七三、八九一一、一〇三三一、一〇三三二番）。

それらは一緒に集められていわば王国を構成しています。このように人間のもとで秩序づけられています、それでも人間はこれらの秩序についてまったく何も知りません。しかし、そのあるものは来世で彼に明らかにされます、なぜなら、そこではそれらの秩序にしたがって彼の思考と情愛が広がっているからです。もし支配愛が天界の愛から構成されているなら、天界の社会の中へ広がります、しかし支配愛が地獄の愛から構成されているなら、地獄の社会の中へ広がります。

霊と天使たちのすべての思考と情愛が社会の中へ広がっていることは、「天界の天使の知恵」の章〔**二六五**～**二七五**番〕の中に、また「天界の形、その形にしたがってそこに交わりと伝達がある」の章〔**二〇〇**～**二一二**番〕の中に見られます。

四七八　しかし、今まで言われたことは、単に理性的な人間の思考に働きかけるものです。感覚にもまた把握されるように、そのことが説明され、確信される〔霊界での〕経験を示します――

第一、人間は、死後、自分自身の愛あるいは自分自身の意志である。

第二、人間は、自分自身の意志または支配愛に関してどのようなものであるかにしたがって、永遠にとどまる。

第三、愛が天界的で霊的である人間は天界へ行く、愛が天界的で霊的でなくて、身体的で世俗的である人間は地獄へ行く。

第四、信仰は、天界的な愛からのものでないなら、人間に残らない。

第五、活動での愛は残る、したがって人間のいのちは残る。

四七九　(i) **人間は、死後、自分自身の愛あるいは自分自身の意志である**ことは、多くの経験から私に証明されました。

全天界は愛の善の相違にしたがって社会に分かれています。天界に上げられて天使となっているそれぞれの霊は、彼の愛がある社会へ導かれ、そこに来るとき、自分自身のもとへ、いわばそこに生まれた家へ来たかのようです。このことを天使は認めており、そこの自分に似た者たちと社会を形成します。

そこから出かけ、他のところへ来るとき、常にある種の抵抗があり、自分と似た者へ、このように自分自身の支配愛へ戻ろうと願う情愛があります。

天界の中の交わりは、このように行なわれます。

同様に地獄にもまた、天界に対立している愛にしたがって交わりがあります（天界を構成する社会があること、そしてまた地獄に社会があり、それらのすべてが愛の相違にしたがって別れていることは前の**四一**～**五〇**番それと**二〇〇**～**二一二**番参照）。

［2］人間が、死後、自分自身の愛であることは、次のことからもまた明らかにすることができました。その者の支配愛と一つにならないものは、その時、遠ざけられ、いわば彼からそれらが取り除かれることです。善である者は、すべての不調和あるいは不一致のものが、彼から遠ざけられ、いわば取り除かれ、そのように自分自身の愛の中に導かれます。悪い者も同様ですが、しかし、悪い者には真理が、善い者には虚偽が、最後に、それぞれの者が自分自身の愛になるようにまでも取り除かれる、という相違があります。このことは第三の状態の中で人間霊になされますが、そのことについては、あとで述べます。

このことがなされる時、変わることなく自分の顔を自分自身の愛へ向けていて、どれほど向きを変えても、

常にその愛が目の前にあります（前の**一二三**、**一二四**番参照）。

［3］すべての霊は、自分自身の支配愛の中に保たれさえするなら、好むどんなところへも、導かれることができます。このようになることをどれほど知っていて、抵抗しようと思っても、抵抗することはできません。支配愛に反して、何かを行なうことができるかどうか、数多く試されました、しかし、むだでした――彼らの愛は縄かまたは綱のようであり、いわばそれによって縛りつけられ、それによって引っ張られ、それから解かれることはできません。

世の人間も同様であって、彼自身の愛が彼を導き、自分自身の愛を通して他の者により導かれます。けれども、霊になる時、外観に他の愛を見せて、自分のものでない愛を偽ることは許されないので、さらにそうなります。

［4］人間の霊がその者の支配愛であることは、来世でのすべての交わりから明らかにされています。なぜなら、だれかが他のある者の愛にしたがって行ない、話すほど、それだけその他の者は、機嫌のよい生きいきとした満足した顔つきで、全体が見られます、しかし、だれかがその者の愛に反して行ない、話すほど、それだけ彼の顔は、変わり、暗くなり、見えなくなり始め、ついには、そこにいなかったかのように全体が消えるからです。

このようなことは世では何ら存在することができないので、私はしばしば不思議でした――しかし、「同様のことが人間の中の霊で起こっている」と言われました。ある者が他の者と疎遠になるとき、もはやその者の視野の中にいないのです。

［5］霊が自分自身の支配愛であることは、それぞれの霊がその愛に一致するすべてのものを捕らえ、自分自身のものとし、そして一致しないすべてのものを投げ返し、自分自身から追い出すことから――それぞれの愛は海綿状のまた多孔性の木質のようであって、その植物的な生長に役立つような液体を吸収し、他のものをはねつけます。また、自分の食物を知っているすべての種類の動物のようであって、その性質に一致するものをほしがり、一致しないものを拒絶することからも明らかです――それぞれの愛はそれ自体のものから、悪の愛は虚偽から、善の愛は真理から養育されることを欲するからです。

何度か見ることがありましたが、それは、ある善い単純な者が、悪い者に真理と善を教えることを欲しました、しかし、その者たちは教えることから遠くへ逃げ去り、自分自身〔と似た者たち〕のところに来たとき、その愛に一致する虚偽を快楽とともに捕らえたこと――さらにまた、善霊が自分たちの間で真理について話したところ、居合わせた善い者はそれを望みとともに聞きました、しかし、同じく居合わせた悪い者はそれを聞かないかのように、何も注意を向けなかったことです。

霊たちの世界に道が現われます。あるものは天界へ、あるものは地獄へ、それぞれが、ある社会へ導く道です――善い霊は、天界へ導く道、自分自身の愛の善の中にある社会へ導く道以外の他の道へは行きませんし、他へ向かう道は見ません。しかし、悪い霊は、地獄へ導く道、自分自身の愛の悪の中にある社会へ導く道以外の他の道へは行きません。他へ向かう道は見ません、見ても入ろうとはしません。

霊界の中のこれらの道は、実在する外観であって、真理と虚偽に対応します。それゆえ、みことばの中の「道」は、それらを意味します。*4

＊4　「道」・「わだち」・「路地」・「街路」は、善へ導く真理を意味し、そのようにまた悪へ導く虚偽を意味する（六二七、二三三、一〇四二二番）。
「道を掃くこと」は、真理が受け入れられるように準備することである（三一四二番）。
「道を知らせること」は、主についてであるとき、善へ導く真理を教えることである（一〇五六五番）。

これらの証拠となる経験から、最初に理性から言われたことが、すなわち、それぞれの人間は死後、自分自身の愛と自分自身の意志であることが確信されます――意志と言われるのは、それぞれの意志そのものが彼の愛であるからです。

四八〇 (ii) **人間は、自分自身の意志または支配愛に関してどのようなものであるかにしたがって、永遠にとどまる**こともまた多くの経験によって証明されました。

二千年前に生き、その生涯が歴史に述べられていて、ここからよく知られた者と話すようになりました――彼らは、今なお彼ら自身と似ており、完全に記述されたような者たちであること、このように愛に関して、愛からまた愛にしたがって、彼らの生活があったことがわかりました。

他に、千七百年前に生き、歴史からもまたよく知られていた者がいました。また、四百年前、三百年前の者など、彼らともまた話すようになりました――同様の情愛が今なお彼らのもとで支配していることがわかりました。彼らの愛の快さが対応するそのようなものに変わった以外に、他の違いはありませんでした。

天使から、「支配愛からの生活は、だれもが自分自身の愛であるので、だれのもとでも決して永遠に変化しません。それゆえ、霊のもとの愛を変えることは、その者自身のいのちを奪うかまたは消すことです」と言われました。

その理由もまた言いました。すなわち、「人間は、死後、世でのように、もはや教えによって改心されることはできません。自然的な知識と情愛から成り立つ最外部の面が、その時、休止し、霊的なものでないので、開かれることはできないからです(前の**四六四**番参照)。その面の上に、心(mens)またはアニムス(気質)

のものである内的なものが、家がその土台の上に休むように、休みます。ここから、人間は、彼の愛からの生活が世であったように、そのような生活を永遠に続けます」。

天使は、〝人間が、それぞれの者がその支配愛がどのようであるかによってそのような者となっていること〟を知らず、〝多くの者が、生活がどんなものであっても直接の慈悲から、信仰のみから救われると信じ、神的慈悲は間接的であること〟を知らないこと、〝主により、世と同様に、その後も永遠に導かれること、悪の中に生きない者は慈悲から導かれること、信仰は、主からのものである天界的な愛から発出する真理への情愛であること〟も知らないことに大いに驚きます。

四八一 (iii) **愛が天界的で霊的である人間は天界へ行く、愛が天界的で霊的でなくて、身体的で世俗的である人間は地獄へ行く**ことは、私の見た天界に上げられた者から、また地獄に投げ込まれたすべての者から、私に明らかとなりました。

天界に上げられた者には、天界的で霊的な愛からの生活(いのち)がありました。けれども、地獄に投げ込まれた者には、身体的で世俗的な愛からの生活(いのち)がありました。

天界的な愛は、善・誠実・公正であるゆえに、善・誠実・公正を愛することであり、それらへの愛からそれらを行なうことです。ここから、彼らに善・誠実・公正の生活があり、それらは天界の生活です。

それらのためにそれらを愛し、それらを行なう、すなわち、それらに生きる者は、それらは主からのものであるので、主をもまたすべてにまさって愛します。それらは愛さなければならない隣人であるので、隣人もまた愛します。[*5]

けれども、身体的な愛は、善・誠実・公正をそれら自体のためでなく、自分自身のために愛することです、それらによって名声・名誉・利益を獲得するからです。彼らは、善・誠実・公正の中に、主と隣人を見ないで、自分自身と世を見ており、欺瞞に快さを感じています。そして欺瞞からの善・誠実・公正は、悪・不誠実・不正であり、彼らが愛しているのは、善・誠実・公正の中にある悪・不誠実・不正です。

[2]愛はこのようにそれぞれの者の生活(いのち)を決定するので、それゆえ、すべての者は、死後、霊たちの世界にやって来ると直ぐに、どのような者であるか検査され、似た愛にいる者と結びつけられます。天界的な愛の中の者に、天界の者が、身体的な愛の中の者に、地獄の者が結びつけられます。

そしてまた、第一と第二の状態が過ぎ去った後は、もはや互いに見ず、互いに知りもしないように分離されます。それぞれの者が、心のものである内的なものに関してだけでなく、顔・身体のもの・話し方である外的なものに関してもまた、それぞれの者が外部でも自分の愛の似姿となるので、自分自身の愛となるからです。

身体的な愛にいる者は、粗野で、暗く、黒く、奇形に見えます。けれども、天界的な愛にいる者は、元気に満ち、明るく、輝いて、美しく見えます――アニムス(気質)と思考でもまた完全に異なっています。天界的な愛にいる者は、知性と知恵もあります。けれども、身体的な愛にいる者は、愚鈍で、いわば馬鹿者です。

[3]彼らの思考と情愛の内的なものと外的なものを眺めることが与えられるとき、天界的な愛の中にいる者は、内的なものが光のように、ある者の内的なものは炎のような光のように、また外的なものは虹のようにいろいろな美しい色に見えます――しかし、身体的な愛の中にいる者は、彼らの内的なものが、閉ざされているので、黒いもののように、内部で悪意のある欺きの中にいたある者の内的ものは暗い火のように見えます。

けれども、外的なものはきたない色に見え、惨めな外観をしています(主が喜ばれるたびごとに、霊界で心(mens)とアニムスに属す内的なものと外的なものは見えるように示されます)。

[4]身体的な愛の中にいる者は、天界の光の中では何も見ません――天界の光は彼らに暗黒です。しかし、炭火からの光のようである地獄の光は、彼らに明るい光のようです。さらにまた天界の光の中で彼らの内的な視覚は、狂うほどにまでも暗くされ、それゆえ、彼らはそれを避け、洞窟やほら穴の中に、彼らのもとの

＊5 主は、すべてにまさって愛されなくてはならないので、最高の意味で隣人である。しかし、主を愛することは主からのものを愛すること、このように善と真理を愛することである、主からのすべてのものの中に主がおられるからである(二四二五、三四一九、六七〇六、六七一一、六八一九、六八二三、八一二三番)。
主からの善と真理を愛することは、それらにしたがって生きることであり、このことが主を愛することである(一〇一四三、一〇一五三、一〇三二〇、一〇三三六、一〇五七八、一〇六四五番)。
すべての人間、社会、さらに祖国や教会は、そして普遍的な意味で主の王国は、隣人である。またそれらに、それらの状態がどんなものかにしたがって善の愛から、善を行なうことが隣人を愛することである。このように、それに利益を図らなければならないそれらの善が隣人である(六八一八～六八二四、八一二三番)。
誠実という道徳的な善、公正という市民的な善もまた隣人である。誠実で公正な愛から誠実で公正に行動することは、隣人を愛することである(二九一五、四七三〇、八一二一～八一二三番)。
ここから、隣人に対する仁愛は人間の生活のすべてのものに広がっており、すべての職務とすべての働きの中で、善と公正を行なうこと、そして心から誠実に行動することは隣人を愛することである(二四一七、八一二一、八一二四番)。
古代教会の中の教えは仁愛の教えであり、ここから彼らに知恵があった(二三八五、二四一七、三四一九、三四二〇、四八四四、六六二八番)。

悪からの虚偽にしたがって、奥深く隠れます――けれども、これに反して、天界的な愛の中にいる者は、天界の光の中へ、さらに内部へとやって来るほど、それだけ明るく、すべてのものを、そしてまたすべての美しいものを見ます。そしてそれだけ知性と知恵で真理を知覚します。

［5］身体的な愛の中にいる者は、天界の熱の中で決して生きることができません、なぜなら、天界の熱は天界的な愛であるからです、しかし、地獄の熱の中で生きることができ、その熱は自分に好意を持たない他の者に激怒する愛です。

他の者への軽蔑・敵意・憎しみが、その愛の快さです。それらの中にいるとき、自分自身のいのち（生活）の中にいます。善そのものから他の者に善を行なうこと、また善そのものために善を行なうこととは何かまったく知らないで、ただ悪から、また悪のために善を行なうことしか知りません。

［6］身体的な愛の中にいる者は、天界の中で呼吸することもできません――ある悪い霊が天界へ連れて行かれるとき、身もだえの中で苦しむ者のように、あえぎながら呼吸します。けれども、天界的な愛の中にいる者は、天界の内部にいればいるほど、それだけ自由に呼吸し、豊かに生きます。

これらから、天界的で霊的な愛は、その愛に天界のすべてのものが刻み込まれているので、人間のもとで天界であること、また天界的で霊的なものでない身体的で世俗的な愛は、その愛に地獄のすべてのものが刻み込まれているので、人間のもとの地獄であることを明らかにすることができます。

これらから、その者に天界的で霊的な愛のある者が天界へ行くこと、そしてその者に天界的で霊的なものがなく身体的で世俗的な愛のある者が地獄へ行くことが明らかです。

四八二　(iv) **信仰は、天界的な愛からのものでないなら、人間に残らない**ことは、もしそれらの事柄について私が見て、聞いたことが提示されるなら、一冊の本を満たすほどの多くの経験によって私に明らかにされました。

私は、天界的で霊的なものがなくて身体的で世俗的な愛の中にいる者には、まったく何も信仰がなく、与えられることもできず、自分自身の愛に仕えるので、ただ真理であることの知識または信念があるだけであることを証言することができます。

自分は信仰の中にいると思っていた者から多くの者が、信仰の中にいる者のところへ連れて来られました。そして〔彼らの間で〕伝達が与えられた時、自分たちに何も信仰がないことを知覚しました――また真理やみことばをただ信じるだけでは信仰ではなく、天界的な愛から真理を愛し、内的な情愛からそれを欲し、行なうことが信仰であると告白することもできました。

さらにまた、彼らが信仰と呼んだその信念は、ただ冬の光のようなものであることも示されました。その中には熱がないので、地上のすべてのものは凍るような寒さに縛られて不活発になり、雪の下に横たわります。それゆえ、彼らのもとの間違った信念の信仰の光は、天界の光線に打たれると直ぐさま消えるだけでなく、濃い暗黒のようにもなり、その中ではだれも、自分自身すら見えません。その時、同時に、内的なものは、まったく何も理解しないほどに暗くなり、ついには虚偽から狂います。

それゆえ、このような者のもとで、彼らがみことばと教会の教えから知り、自分たちの信仰であると言ったそれらのすべての真理は取り除かれ、それらに代わって、彼らの生活の悪と一致するすべての虚偽を教え込まれます。すべての者は自分自身の愛の中に、それらと一致する虚偽の中に入れられるからです――その

時、彼らの中にある真理は、悪の虚偽に抵抗するので、憎まれ、退けられ、こうして捨てられます。

私は、天界と地獄の事柄についてのすべての経験から、「教えから信仰のみを告白し、生活に関しては悪の中にいたすべての者は地獄にいる」ことを証言できます。私は数千人もの地獄に投げ込まれる者を見ました、そのことについては小著『最後の審判と滅ぼされたバビロニア』の中で述べてあります。

四八三　(v) **活動での愛は残る、したがって人間のいのちは残る**ことは、今、示された経験から、前に言われた行為と働きについて、活動での愛は働きと行為であることから、結論としていえます。

四八四　すべての働きと行為は、道徳的で市民的な生活に属し、ここから誠実と正直に、さらに公正と公平に目を向けているものであることを知らなくてはなりません。

誠実と正直は道徳的な生活に、また公正と公平は市民的な生活に属します。

それらが行なわれるときの愛は、天界的かあるいは地獄的です――道徳的で市民的な生活の働きと行為は、天界的な愛から行なわれるなら天界的です。なぜなら、天界的な愛から行なわれるものは、主から行なわれ、主から行なわれるものは、すべて善であるからです。しかし、道徳的で市民的な生活の働きと行為は、地獄的な愛から行なわれるなら地獄的です。なぜなら、自己愛と世俗愛である愛から行なわれるものは、人間自身から行なわれ、人間自身から行なわれるものは、すべては本質的に悪であるからです。本質的に見られた人間は、すなわち、彼のプロプリウム(固有のもの)から見られるなら、悪以外の何ものでもないからです。*6

*6　人間のプロプリウムは神よりも自分自身を、また天界よりも世を愛することである。そして自分自身と比べて隣人を無とすること、このように自己愛と世俗愛である(六九四、七三一、四三一七番)。

このプロプリウム中に人間は生まれており、それは執拗な悪である(二一〇、二一五、七三一、八七四～八七六、九八七、一〇四七、二三〇七、二三〇八、三五一八、三七〇一、三八一二、八四八〇、八五五〇、一〇二八三、一〇二八四、一〇二八六、一〇七三二番)。

人間のプロプリウムから、すべての悪だけでなく、すべての虚偽もまたある(一〇四七、一〇二八三、一〇二八四、一〇二八六番)。

人間のプロプリウムからの悪は、他の者への軽蔑・敵意・憎しみ・復讐・残酷・欺きである(六六六七、七三七〇、七三七二、七三七四、九三四八、一〇〇三八、一〇七四二番)。

人間のプロプリウムが支配すれば支配するほど、それだけ愛の善と信仰の真理は退けられるか、窒息させられるか、あるいはゆがめられる(二〇四一、七四九一、七四九二、七六四三、八四八七、一〇四五五、一〇七四二番)。

人間のプロプリウムは、彼のもとにある地獄である(六九四、八四八〇番)。

人間がプロプリウムから行なう善は、善ではなく、本質的に悪である(八四八〇番)。